１１月予報（全８枚）

病防第３８号
令和８年（２０２６年）１０月２７日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察予報について（送付）

このことについて、令和８年度（２０２６年度）病害虫発生予察予報第８号を発表しましたので送付します。

予　　報

令和８年度（２０２６年度）病害虫発生予察予報第号（１１月予報）

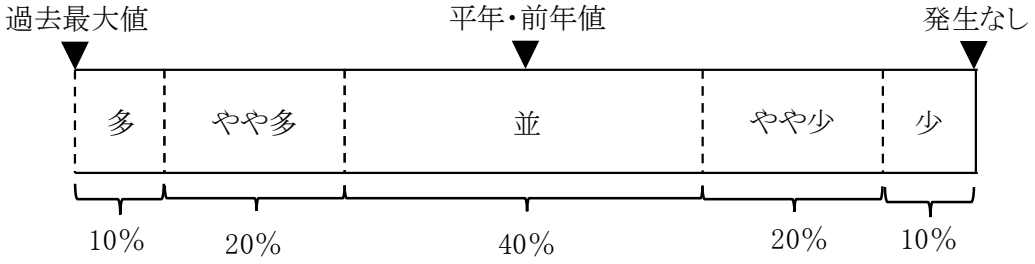
Ⅰ　主要な病害虫の発生予想概要

作　物	病害虫名	１０月の発生状況		**１１月の発生予想**	
		平年比		**平年比**	**前年比**
茶	カンザワハダニ		やや少	**やや少**	**並**
かんきつ	ミカンハダニ		並	**並**	**やや多**
トマト	黄化葉巻病	冬春作	並	**冬春作　並**	**並**
	すすかび病	冬春作	並	**冬春作　並**	**並**
	トマトキバガ			**冬春作**	**並**
なす	すすかび病	冬春作	並	**冬春作　並**	**並**
いちご	ハダニ類	本ぽ	並	**本ぽ　並**	**やや少**
うり科野菜	退緑黄化病		やや少	**やや少**	**並**
うり科・なす科野菜	コナジラミ類	冬春作	並	**冬春作　並**	**並**
	アザミウマ類	冬春作	並	**冬春作　並**	**並**
野菜類全般	ハスモンヨトウ		並	**並**	**並**
	オオタバコガ		並	**並**	**並**

Ⅱ　その他の病害虫の発生予想概要

部門	１１月の発生予想 平年比	（作物）病害虫名
野菜類	やや多	（野菜類全般）シロイチモジヨトウ
	並	（トマト（冬春作））葉かび病、灰色かび病 （なす（冬春作））灰色かび病 （いちご）うどんこ病 （秋メロン）べと病 （野菜類全般）アブラムシ類

※ 発生程度は平年（過去 10 年間の平均値）・前年と比較し多～少の５段階で示している。



Ⅲ　１１月の主要な病害虫の防除対策と留意点

茶

１）共通事項
・秋季の病害虫の発生は、翌年の発生に大きく影響するので、整枝による被害枝葉の除去に努める。
・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。

２）虫害
・11月中旬になってもカンザワハダニが発生している園では、直ちに薬剤防除を行う。一部の園地では、アブラムシ類やチャトゲコナジラミの発生が散見されるため、秋芽整枝後から冬季にかけては、他の害虫防除と併せてマシン油乳剤を使用する。多くの害虫は気温の低下とともに古葉に移っていくため、薬剤散布前にすそ刈り行い、すそ葉の葉裏にも薬液が十分にかかるよう、すそ部から頂上に向けて斜め上方に散布する。

果樹

1）共通事項
・秋季の病害虫の発生は、翌年の発生に大きく影響するので、発生・伝染源の除去に努める。
・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。

2）病害
・かんきつでは、樹上の発病果や園内の落果実は放置せず、積極的に園外に処分する。貯蔵病害に対する防除効果を高めるため、２系統（FRACコード：１、Ｍ７）の薬剤を混用して散布する。
・なしでは、収穫後から落葉期にかけて黒星病の薬剤防除を行う。

3）虫害
・引き続き気温が平年より高く推移すると予想されており、害虫の発生も遅くまで継続する可能性が高い。発生状況をよく観察し、適期の防除に努める。
・かんきつでは、ミカンハダニ雌成虫の寄生葉率が30～40％または寄生頭数が10葉当たり５～10頭に達したら薬剤防除を行う。

野菜

1）共通事項
・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
・株が大きくなり葉が繁茂すると、葉裏に薬剤が付着しづらいため、薬剤が葉裏にも十分かかるよう注意しながら散布する。

2）病害
・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。
・ウイルスに対しては、発病株が二次伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、直ちに処分する。トマト・メロンでは、ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスに感染する。また、他のウイルス病にも罹病するので、媒介する微小害虫の防除を継続して行う。対策の詳細は、令和８年９月10日付け発生予察技術情報第８号「タバココナジラミのCCYV保毒状況と防除対策について（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/318608.pdf）」や令和８年10月19日付け発生予察技術情報第10号「タバココナジラミのTYLCV保毒状況と防除対策について（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/320900.pdf）」を参考にする。

3）虫害
・ほ場周辺および内部の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので定期的に除草する。
・チョウ目害虫の発生状況については、病害虫防除所ホームページの「調査データ」（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載するフェロモントラップへの誘殺状況を参考にする。対策の詳細は、令和８年10月２日付け発生予察注意報第５号（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/319772.pdf）を参考にする。
・いちごでは、ハダニ多発後は防除が困難になるので、早期発見と早期防除の徹底に努める。対策の詳細と薬剤の選定については、令和７年５月１日付け発生予察技術情報第１号「いちごにおけるナミハダニの薬剤感受性検定の結果について（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf）」を参考にする。
・トマトでは、ほ場をよく見回り、トマトキバガによる被害の早期発見に努める。被害葉や被害果実は速やかに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。本虫に登録のある薬剤防除を行い、ハウス内の密度を抑制する。対策の詳細や薬剤の選定については、令和８年４月１日付け農業革新支援センター情報「トマトキバガに対する防除対策について（http

s://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/240009.html）」や令和８年10月７日付け発生予察技術情報第９号「トマトキバガの発生状況と防除対策（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/320001.pdf）」を参考にする。

ＦＡＸ版はここまで

発生予想の根拠等を含む詳細については、ホームページ掲載の電子版をご利用ください。
https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html

Ⅳ　主要な病害虫の予想発生量（平年比）と根拠

※ 根拠各項に記した先頭の「○」は重視した根拠、「◎」は特に重視した根拠であることを示す。

※ 根拠末尾の（＋）は発生を助長する要因、（－）は発生を抑制する要因、（±）は影響が少ない要因であることを示す。

九州北部地方の向こう１か月（10月24日～11月23日）の気象予報　福岡管区気象台発表

要　　素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気　　温	１０％	２０％	**７０％**
降 水 量	２０％	３０％	**５０％**
日照時間	**５０％**	３０％	２０％

茶

１）カンザワハダニ

（１）予想発生量　平年比やや少

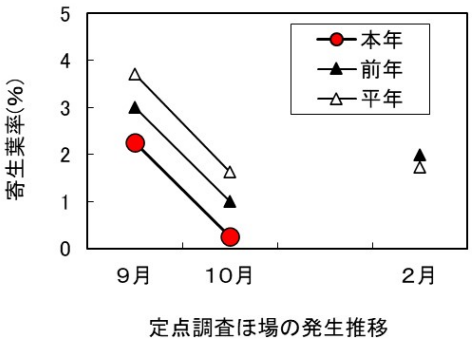
（２）根拠

◎ 10月の定点調査（８か所）では、寄生葉率0.3%（平年1.6%）と平年比やや少の発生であった（－）。

○ 御船町（茶業研究所）の10月第５半旬の調査では、寄生葉は認められず（平年13.2%）、平年比少の発生であった（－）。

◎ 防除員報告（５地域）によると、10月の発生は平年並～やや少であった（±）。

○ 向こう１か月の気温は平年より高く（＋）、降水量は平年より多い見込みである（－）。



定点調査ほ場の発生推移

かんきつ

１）ミカンハダニ

（１）予想発生量　平年並

（２）根拠

◎ 10月の定点調査（22か所）では、雌成虫の寄生葉率3.6%（平年3.5%）、寄生頭数0.5頭／10葉（平年1.1頭／10葉）と平年並の発生であった（±）。

○ 宇城市（果樹研究所）の無防除樹における10月第４半旬の調査では、寄生葉率12.0%（平年12.9%）と平年比並の発生であった（±）。

◎ 防除員報告（７地域）によると、10月の発生は平年比やや多～やや少であった（±）。

○ 向こう１か月の気温は平年より高く（＋）、降水量は平年より多い見込みである（－）。

トマト

1）黄化葉巻病
（1）予想発生量　冬春作：平年並
（2）根拠
◎ 10月の定点調査（7か所）では、発病株は確認されず（発病株率平年1.0%）、平年並の発生であった（±）。
○ 10月の定点調査（7か所）では、コナジラミ類の寄生葉率0.1%（平年4.1%）と平年比やや少の発生であった（－）。
◎ 9月上～中旬に野外で採集したタバココナジラミのトマト黄化葉巻ウイルス（ＴＹＬＣＶ）保毒虫数は、平年比多～少であった（±）。詳細は、令和8年10月19日付け発生予察技術情報第10号（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/320900.pdf）を参照する。
◎ 防除員報告（3地域）によると、10月の黄化葉巻病の発生は平年並であった（±）。
○ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、コナジラミ類の活動に好適な条件である（＋）。

2）すすかび病
（1）予想発生量　冬春作：平年並
（2）根拠
◎ 10月の定点調査（7か所）では、発病株は確認されず（発病株率平年0.2%）、平年並の発生であった（±）。
◎ 防除員報告（3地域）によると、10月の発生は平年並であった（±）。
○ 向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年より多い見込みである（＋）。

3）トマトキバガ
（1）予想発生量　冬春作：前年並
（2）根拠
◎ 県内6か所に設置したフェロモントラップによる9月第5半旬～10月中旬（11月発生の前世代成虫）の誘殺数は、前年並の発生であった（±）。

なす

1）すすかび病
（1）予想発生量　冬春作：平年並
（2）根拠
◎ 10月の定点調査（5か所）では、発病株率0.4%（平年0.0%）と平年並の発生であった（±）。
◎ 防除員報告（2地域）によると、10月の発生は平年並であった（±）。
○ 向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年より多い見込みである（＋）。

うり科野菜

１）退緑黄化病
（１）予想発生量　平年比やや少
（２）根拠
◎　防除員報告（５地域）によると、10 月の発生は平年比やや少であった（－）。
◎　８月上旬～中旬に野外で採集したタバココナジラミのうり類退緑黄化ウイルス（ＣＣＹＶ）保毒虫数は、過去３年の平均と比べて少なかった（－）。詳細は令和８年９月１０日付け発生予察技術情報第８号（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/318608.pdf）を参照する。
○　向こう１か月の気温は平年より高い見込みであり、コナジラミ類の活動に好適な条件である（＋）。

各調査年におけるタバココナジラミの誘殺数、保毒虫率、保毒虫数※

調査年	R5	R6	R7	R8	過去3年の平均値
誘殺数(頭/日/枚)	0.8	0.6	5.9	0.5	2.4
保毒虫率(%)	19.7	31.3	15.3	24.0	22.1
保毒虫数(頭/日/枚)	0.2	0.2	0.8	0.1	0.4

※保毒虫数は、誘殺数×保毒虫率により算出。

いちご

１）ハダニ類
（１）予想発生量　本ぽ：平年並
（２）根拠
◎　10 月の定点調査（６か所）では、寄生葉率 9.3%（平年 6.3%）と平年並の発生であった（±）。
◎　防除員報告（３地域）によると、10 月の発生は平年並であった（±）。
○　向こう１か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

うり科・なす科野菜

１）コナジラミ類
（１）予想発生量　冬春作：平年並
（２）根拠
○　10 月の定点調査では、冬春トマト（７か所）で寄生葉率 0.1%（平年 4.1%）、冬春なす（５か所）で寄生葉率 34.8%（平年 48.4%）と平年比やや少の発生であった（－）。
◎　防除員報告（12 地域）によると、10 月の発生は平年比多～並であった（±）。
○　向こう１か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

2）アザミウマ類
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
○　10月の冬春なすの定点調査（5か所）では、寄生葉率1.6%（平年4.5%）と平年比やや少の発生であった（－）。
◎　防除員報告（12地域）によると、10月の発生は平年比やや少～やや多であった（±）。
○　向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

野菜類全般

1）ハスモンヨトウ
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　10月の定点調査では、冬春トマト（7か所）で寄生株率0.3%（平年0.0%）、冬春なす（5か所）で寄生株率0.8%（平年0.2%）、いちご（6か所）で寄生株率4.3%（平年6.3%）と平年並の発生であった（±）。
○　フェロモントラップによる9月第5半旬～10月中旬（11月発生の前世代成虫）の誘殺数は、八代市で平年並、阿蘇市で平年並、山都町で平年比やや少、合志市で平年比少であった（－）。
◎　防除員報告（9地域）によると、10月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
○　向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

2）オオタバコガ
（1）予想発生量　平年並
（2）根拠
◎　10月の冬春トマト（7か所）と冬春なす（5か所）の定点調査では寄生株は確認されず（冬春トマト寄生株率平年0.0%、冬春なす寄生株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。
○　フェロモントラップによる9月第5半旬～10月中旬（11月発生の前世代成虫）の誘殺数は、八代市で平年比やや多、阿蘇市で平年比やや多、山都町で平年比少、合志市で平年並であった（±）。
◎　防除員報告（6地域）によると、10月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
○　向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

V　農薬安全使用

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう飛散防止を徹底し、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

VI　その他

本情報は病害虫防除所のホームページにも掲載しています。

病害虫発生予察情報に関する詳細な内容等については、病害虫防除所（農業研究センター生産環境研究所内、電話096-248-6490）にお問合せください。



©2010 熊本県くまモン